

[上映スケジュール]

*やむをえない事情により作品及び上映時間が変更される場合がございます。

11.26 [土]	13:00	フランス (134分)
	15:30	愛と激しさをもって (116分)
11.27 [日]	13:00	そんなの気にしない (115分) ★上映後、坂本安美氏によるレクチャー有 (約40分)
	15:45	ドン・ジュアン (100分)
11.28 [月]	17:00	去年マリエンバートで (94分)
	19:00	恋するアナイス (98分)
11.29 [火]	17:00	恋するアナイス (98分)
	19:00	マンディビュル (77分)
11.30 [水]	17:00	マンディビュル (77分)
	19:00	セヴェンヌ山脈のアントワネット (98分)
12.1 [木]	17:00	フランス (134分)
	19:30	《ジャンヌ・ディエルマン》をめぐって (78分)
12.2 [金]	17:00	そんなの気にしない (115分)
	19:15	恋するアナイス (98分)
12.3 [土]	13:00	ミリュエル (118分)
	15:10	デルフィーヌとキャロル (68分) 上映後、斉藤綾子氏によるレクチャー有 (約60分)
12.4 [日]	13:00	インディア・ソング (120分)
	15:15	去年マリエンバートで (94分)
12.5 [月]	17:00	マンディビュル (77分)
	19:00	《ジャンヌ・ディエルマン》をめぐって (78分)
12.6 [火]	17:00	セヴェンヌ山脈のアントワネット (98分)
	19:00	ミリュエル (118分)
12.7 [水]	17:00	デルフィーヌとキャロル (68分)
	19:00	インディア・ソング (120分)
12.8 [木]	17:00	そんなの気にしない (115分)
	19:05	フランス (134分)
12.9 [金]	17:00	ドン・ジュアン (100分)
	19:00	愛と激しさをもって (116分)

[トークイベント]

- 11.27 [日] 坂本安美 (アンスティチュ・フランセ日本映画プログラム主任) によるレクチャー
 12.3 [土] 斉藤綾子 (明治学院大学教授/映画研究者) によるレクチャー

[企画協力]

ジャン=マルク・ラルナン
 Jean-Marc Lalanne

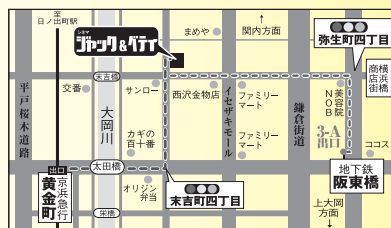
1967年生まれ。90年代半ばから「カイエ・デュ・シネマ」で批評活動を行い、日刊紙「リベラシオン」の文化欄チーフを務めた後、2001年にふたたび「カイエ・デュ・シネマ」に戻り、編集長を務める。2003年から人気カルチャー雑誌「レ・ザンロキュブティール (通称:レザンロック)」の編集長を務めている。フランス国営ラジオ放送フランス・キュルチュールの人気映画討論番組「マスク・エ・ラ・ブリュム」をはじめとしてラジオ番組に出演したり、シネマテーク・フランセーズで講演を行うなど、書く、語る、その両方でフランスの映画批評を牽引し続けている。主な著書:『コクトーと映画、無秩序』(共著、2006年)、『ガス・ヴァン・サント』(共著、2009年)など、すべてカイエ・デュ・シネマ出版社。



入場料金 [全席指定・定員入替制]
 1回券=1500円/大学生1000円/シニア1200円/
 高校生以下1000円/ジャック&ベティ会員、アンスティ
 チュ・フランセ会員1000円/リピーター割引 (劇場窓口
 のみの販売) = 1000円
 開場時間: 上映の10分前
 チケットは、劇場HP (オンライン)、窓口共に、ご鑑賞日
 の3日前から指定席で発売します。

[会場]

横浜シネマ・ジャック&ベティ
 〒231-0056 横浜市中区若葉町 3-51 | ☎ 045-243-9800
<https://www.jackandbetty.net/>



mois de la critique
 映画批評月間

フランス映画の現在 Vol.04

Nouveaux rendez-vous du cinéma français

ジャン=マルク・ラルナン (「レザンロキュブティール」編集長) によるセレクション

11.26 [土] → 12.9 [金] | 横浜シネマ・ジャック&ベティ

[トーク (レクチャー) ゲスト!]

- 11.27 [日] 坂本安美 (アンスティチュ・フランセ日本映画プログラム主任)
 12.3 [土] 斉藤綾子 (明治学院大学教授/映画研究者)

- 主催
 横浜シネマ・ジャック&ベティ
 共催
 一般社団法人コミュニティシネマセンター
 企画協力
 アンスティチュ・フランセ日本
 助成
 アンスティチュ・フランセパリ本部
 オフィシャル・パートナー
 CNC
 笹川日仏財団
 TV5 MONDE
 特別協力
 Bartlab
 レザンロキュブティール
 tapetum works
 ユニフランス
 フィルム提供及び協力
 ビー・フォー・フィルム
 セテラ・インターナショナル
 シャレード
 インディ・セールズ
 マーメイドフィルム
 MK2
 クマサ・ディストリビューション
 ザ・ベスト・サーヴィシング・エヴェー
 WTFilms
 ワイルド・バンチ



フランス映画の現在 Vol.04

Nouveaux rendez-vous du cinéma français

ジャン＝マルク・ラランヌ (『レザンロキュプティエール』編集長) によるセレクション

アンスティチュ・フランセが、フランスの映画媒体、批評家、専門家、プログラマーと協力し、最新のフランス映画を選びすぐり紹介する特集「映画批評月間」。Vol.4は、フランスの人気カルチャー・マガジン「レザンロキュプティエール」編集長ジャン＝マルク・ラランヌによるセレクションをお届けします。

ジャン＝マルク・ラランヌが選ぶ 2020/2022 ベスト

セヴェンヌ山脈のアントワネット **Antoinette dans les Cévennes** de Caroline Vignal

〔2020年／98分／カラー／フランス〕

監督：キャロリーヌ・ヴィニャル 出演：ロール・カラミー、バンジャマン・ラヴェルネ

アントワネットは恋人とのロマンチックなヴァカンスを楽しみにしていたが、彼は妻子とセヴェンヌ山脈へ。アントワネットもセヴェンヌへ向かう。珍道中に同行することになるのは不機嫌なロバのバトリックだった。主演はコミカルかつ繊細な感情の機微を表現する人気女優ロール・カラミー (『女っ気なし』など)、セザール賞最優秀女優賞受賞。非常に成功しているコメディであり、女性によるあらたなる西部劇といえるだろう。



マンディビュル 2人の男と巨大なハエ **Mandibules** de Quentin Dupieux

〔2020年／77分／カラー／フランス〕

監督：カンタン・デュビュール 出演：ダヴィ・マルセ、グレゴワール・ルディック、アデル・エグザルコプロス

おまぬけコンビのジャン＝ガブとマニュは、車のトランクの中に巨大なハエを見つける。ふたりは金儲けのためにハエを調教しようとするが、そこにセシルという女性が通りかかり…。プニュエルや70年代のフランス犯罪映画など様々なジャンルを取り入れ、笑いの中にシュールで不気味な世界の相貌をのぞかせる鬼オデュビュールによるファンタジック・コメディ。ヴェネツィア国際映画祭正式出品作品。夏の風のように軽やかに恩恵をもたらしてくれる『マンディビュル』は、率直さを賛美する幸福に満ちたヴァカンスの物語である。



恋するアナイス **Les Amours d'Anaïs** de Charline Bourgeois-Tacquet

〔2021年／98分／カラー／フランス〕

監督：シャルリーヌ・ブルジョワ＝タケ

出演：アナイス・ドゥムースティエ、ヴァレリア・ブルーニ＝テデスキ、ドゥニ・ボダリデス

博士論文も書き終えられず、将来にも恋愛にも見通しが立たない30歳のアナイス。ダニエルという年配の男性とつき合い始めるが、次第にダニエルのパートナー、エミリーに魅かれていく。第74回カンヌ国際映画祭批評家週間で見目を集めたC・ブルジョワ＝タケの長編デビュー作。愛が科学であるならば、才能溢れるC・ブルジョワ＝タケは、知的なる愛についての学びの映画を、不純で喜びあふれる方法で揺り動かし、再生させる独自の方式を完成させている。



LADA 52 R © Les Films Pelléas Année Zéro

フランス **France** de Bruno Dumont

〔2021年／134分／カラー／フランス＝ドイツ＝イタリア＝ベルギー〕

監督：ブリュノ・デュモン 出演：レア・セドゥ、バンジャマン・ピオレ、ユリアーネ・ケーラー

スター・ニュースキャスター、フランスは、ある事件をきっかけに世界の「不幸」に目を向けようとするのだが…。ブリュノ・デュモン最新作。第74回カンヌ国際映画祭コンペ部門出品。ひとりの女性の肖像であり、フランスという国、メディアというシステムの肖像でもある。

普段はプロの俳優を使うことを警戒しているデュモンが、不実なる女・フランスに、自分が何者であるかを十分に自覚している女優レア・セドゥを選んだのは偶然ではないだろう。外見と内面の葛藤、壮大なスケタクルを、登場人物と女優が共に観察する(…)フェイクニュースが溢れる現実につしかに亀裂が入り始める。



© R. Arpajou

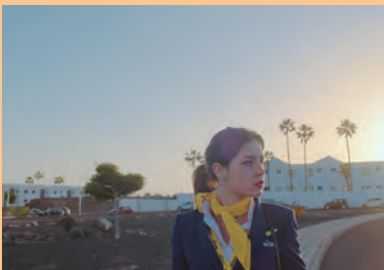
そんなの気にしない **Rien à foutre** d'Emmanuel Marre et Julie Lecoustre

〔2022年／115分／カラー／フランス＝ベルギー〕

監督：エマニュエル・マール&ジュリー・ルクストル

出演：アデル・エグザルコプロス、アレクサンドル・ペリエ、マール＝タキヌ

格安航空の客室乗務員カサンドラはフライトからフライトへ、パーティからパーティへ、しがらみのない毎日を生きている。しかし、会社のプレッシャーは厳しさを増し、疲れ切ったカサンドラは故郷へ帰る…。『マンディビュル』に続き、アデル・エグザルコプロス (『アデル、ブルーな熱い色』) が素晴らしい演技を見せている。第75回カンヌ国際映画祭批評家週間出品。ジュリー・ルクストルとエマニュエル・マールは、即興と綿密な再現を織り交ぜた演出で、ジェネレーションYの感動的な物語を描き出すことに成功している。



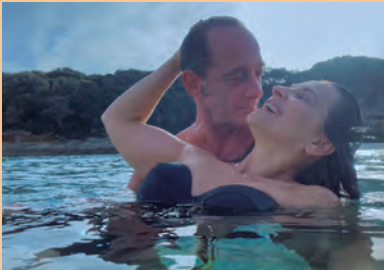
愛と激しさをもって **Avec amour et acharnement** de Claire Denis

〔2022年／116分／カラー／フランス〕

監督：クレール・ドゥニ

出演：ジュリエット・ピノッシュ、ヴァンサン・ランドン、グレゴワール・コラン、マティ・ディオップ、ビュル・オジエ

10年近く共に暮らすサラとジャンは情熱的に愛し合っている。かつて、サラの恋人フランソワが親友のジャンにサラを紹介し、サラはジャンのためにフランソワに別れを告げた。ふたりの前にフランソワが現れ、歯車が狂い始める。第72回ベルリン映画祭最優秀監督賞受賞。演出面で本当に素晴らしい映画だ。驚くべきファーストショット、スチュアート・A・ステイブルズのギター、海の残響、シンプルな会話シーンに不協和音のように差し挟まれるカット、何度も唱えられる言葉…すべてが、脅威にさらされた愛の物語に驚くべき表現力を与えている。そしてなにより、役者たちの力が最大限に発揮されている。



ドン・ジュアン **Don Juan** de Serge Bozon

〔2022年／100分／カラー／フランス〕

監督：セルジュ・ボゾン 出演：ヴィルジニー・エフィラ、タハール・ラヒム

2022年、ドン・ジュアンはもはやすべての女性を誘惑する男ではなく、自分を捨てたひとりの女性に執着する男になっていた。『ダゲレオタイプの女』のタハール・ライムが、『めまい』のスコッティのように、愛する女性のイメージに取り憑かれた男を演じるミュージカル。第75回カンヌ国際映画祭プレミア部門出品。セルジュ・ボゾンは、彼の映画のいつもの奇抜さを軽減させ、それを細かい振り付けの身ぶりの中へと封じ込める。哀調を帯びたダンスが全編に映し出され、愛を告白し合う歌声が美しさを醸し出している。



生誕90周年 デルフィーヌ・セイリグ特集

Rétrospective Delphine Seyrig

アラン・レネのミュージズ、60年代の演劇界の女王であり、トリュフォーやドゥミからも賛美されたデルフィーヌ・セイリグ (1932-1990) はその名声の絶頂期であった70年代にフェミニズムの闘いに身を投じ、新しい形式やヴィジョン、テーマを歓迎する女性監督たちと主に仕事していきます。当時25歳のシャンタル・アケルマンと傑作『ジャンヌ・ディエルマン』を生み出し、マルグリット・デュラスからは「フランスで、いやおそらく世界で最も偉大な女優」と評されました。自分のイメージを壊すことを恐れず、変化し続けていった自由な女性デルフィーヌ・セイリグのフィルモグラフィーを辿ります。

去年マリエンバートで

L'Année dernière à Marienbad d'Alain Resnais

〔1961年／94分／モノクロ／フランス＝イタリア〕

監督：アラン・レネ 出演：ジョルジョ・アルベルタッツィ、サッシャ・ピトエフ
バロック調の宮殿のようなホテル、男はひとりの女に「去年マリエンバートで出会い、愛し合った」と語りかける。1959年ニューヨークで舞台に立っていたセイリグに魅了されたレネは、ジャン・レイ原作の『怪盗クモ団』の映画化を企画、「クモ団」の首領役をセイリグにと考えたが、予算の問題等から企画を変更、アラン・ロブ＝グリエの脚本、ココ・シャネルの衣装で映画史に残る作品、忘れがたいヒロインが誕生した。ヴェネツィア国際映画祭金獅子賞を受賞し大成功を収めた本作によってセイリグは国際的な名声を得た。

ミュリエル

Muriel ou le temps d'un retour d'Alain Resnais

〔1963年／118分／カラー／フランス〕

監督：アラン・レネ 出演：ジャン＝パティスト・チャーレ、ジャン＝ピエール・ケリアン、ニタ・クライン

1962年9月、アルジェリア戦争から帰還した義理の息子と暮らす古美術商のエレーヌのもとに、かつての恋人アルフォンスが姪と称する若い女と訪ねてくる。再びレネと組んだ本作で、セリングは一転、初老の女性に挑んだ。『ミュリエル』には10、20の主題がある。レネや (原作者の) ジャン・ケイヨールさえ考えもしなかったテーマさえ存在している。それが偉大な映画の力である (アンリ・ラングロワ)

インディア・ソング

India Song de Marguerite Duras

〔1974年／120分／カラー／フランス〕

監督：マルグリット・デュラス

出演：ミシェル・ロンスタール、マチュー・カリエール、クロード・マン

1930年代のインド・カルカッタ。フランス大使夫人アンヌ＝マリー・ストレットルへの不可能な愛で狂気に陥る副領事の物語。全編においてオフの声を活用し、映像と音響の関係の新たな境地を開いたデュラスの映画における代表作。セイ

リグの女優としての才能を高く評価し、映画、舞台で共に仕事をし続けたデュラスは、「彼女の自由を妨げるものは、他者に加えられた不正だけだ」と述べ、その人間性にも敬意を払っていた。

《ジャンヌ・ディエルマン》をめぐって

Autour de « Jeanne Dielman » de Sami Frey

〔1975年／78分／モノクロ／フランス〕*ビデオ映像

監督：サミー・フレイ 出演：シャンタル・アケルマン

『ブリュッセル1080、コメルス河畔通り23番地、ジャンヌ・ディエルマン』の撮影中に、セイリグの恋人であったサミー・フレイが撮影し、シャンタル・アケルマンが編集したドキュメンタリー。セイリグとアケルマンがどのように「ジャンヌ・ディエルマン」を創っていったか、演出上の細かいやり取りや、撮影中のインタビューや若いスタッフたちとの会話からセイリグの女性としての生き方や仕事に臨む姿勢が伝わってくる貴重な作品。

デルフィーヌとキャロル

Delphine et Carole de Callisto Mc Nulty

〔2019年／68分／モノクロ／フランス＝スイス〕

監督：カリスト・マクナルティー 出演：キャロル・ロソフプロス、マルグリット・デュラス、シモーヌ・ド・ボーヴォワール、シャンタル・アケルマン

セイリグと、フランスで2台目 (1台目を手に入れたのはジャン＝リュック・ゴダール) のビデオカメラを手に入れ、やがてフランスにおけるビデオアートのパイオニア的存在となったキャロル・ロソフプロスの出会いを描く。二人は協同し、1970年代のフェミニズム運動の只中にビデオカメラを手飛び込んでいく。その活動は世界の支配的な常識を揺るがす、非妥協的、不遜で過激なユーモアに溢れるものだった。

(写真上から)『去年マリエンバードで』© 1960 STUDIOCANAL - Argos Films - Cineriz /『ミュリエル』/『インディア・ソング』/『ジャンヌ・ディエルマン』をめぐって』/『デルフィーヌとキャロル』